

# 1999年春季研究発表会予稿集

---

1998年度総会での会員からの提案に基づき、研究発表会での討論をより活発なものにするために、学会ホームページに予稿集のページを設け、発表者はここに発表要旨を前もって掲載できることになりました。データベース委員会では、要旨原稿を受け取り次第、本ページに掲載していき、学会プログラムが掲載された段階で、プログラムともリンクを張る予定です。

なお、各発表者には通知済みですが、まだ、発表要旨をお送りいただいていない発表者は、e-mailにて、[データベース委員会](#)までお寄せ下さい。

---

招待講演: [Die Entwicklung der deutschen Schriftsprache vom 16. bis 18. Jahrhundert unter dem Einfluß der Konfessionen](#)

Prof. Dr. Peter Wiesinger (Universität Wien, Präsident der IVG)

シンポジウム「[ゲーテとモデルネ](#)」(Goethe und die Moderne)

司会：木村直司

1. [レオナルドーゲーテーフロイト](#) 高橋明彦
2. [ゲーテ的人間の限界ークラークスの哲学から見たゲーテ像](#) 田島正行
3. [ヘルマン・バルとベルリン・モデルネ](#) 神野眞悟
4. [多民族都市プラハにおけるゲーテーカフカにみるゲーテ像](#) 三谷研爾

シンポジウム「[レキシコンと文法 - 項構造の扱いをめぐって](#)」

司会：高橋由美子・岡本順治

1. [名詞派生動詞の形成と語彙概念構造](#) 鈴村直樹
2. [語彙知識, 統語構造, 意味解釈](#) 小川暁夫
3. [結果構文と動能構文: 項構造の拡張の2つの形](#) 岡本順治
4. [語彙概念構造と再帰代名詞の出没](#) 大矢俊明
5. [自動詞受動の種類](#) 鷲尾龍一

一般発表

1. [ドイツ語の心態詞における音声的特徴について](#) 生駒 美喜・川森 雅仁
  2. [叙述法の識別と主語の表現](#) 藤縄康弘
  3. [Über das Deutschland- und Deutschenbild japanischer Deutschstudenten - Eine empirische Studie und ihre methodologisch-didaktischen Aspekte](#) Matthias Grünwald
- 

[日本独文学会ホームページに戻る](#)

# Die Entwicklung der deutschen Schriftsprache vom 16. bis 18. Jahrhundert unter dem Einfluß der Konfessionen

Prof. Dr. Peter Wiesinger (Universität Wien, Präsident der IVG)

---

Die allgemeine deutsche Schriftsprache basiert auf der ostmitteldeutschen Schreibsprache und erfuhr durch Luther und die Reformation rasche Verbreitung in alle deutschsprachigen Gebiete. Da die Habsburger seit dem 15. Jh. deutsche Kaiser waren, gelangten auch ihre oberdeutschen Amtsschriften ueberall hin. Als Katholiken foerderten sie in ihren Erblaendern die Gegenreformation. Wie sich die deutsche Schriftsprache vom 16.-18. Jh. zum Durchbruch einer allgemeinen deutschen Schriftsprache kam, ist Gegenstand des Vortrags.

---

[戻る](#)

# 「ゲーテとモデルネ」 (Goethe und die Moderne)

司会 木村直司

ゲーテの記念祭が祝われるとき常に主題となるのは「ゲーテの現代的意義」あるいは「ゲーテの現代性」というような現在に直結する問題である。本年はゲーテの生誕250周年であるばかりではなく、ドイツ連邦共和国成立50年とドイツ再統一10年にも当たっているため、「ヨーロッパの文化都市」に選ばれたワイマールを中心にさまざまな催し物が企画されている。それらにおいてゲーテの意義は、多かれ少なかれ、欧州連合により新しい様相を呈しはじめた現代のヨーロッパとの関係、あるいは現代にまで及ぶ世界的影響に求められている。

しかし文学史的には、世紀末という時代的共通項ないし平行関係からも、生誕150年が祝われた1899年前後の世紀転換期におけるゲーテとドイツ文学との関係を再検討することの方がより重要であるようにみえる。もとより、当時のいわゆるモデルネの文学の拠点としてウィーン、ミュンヘン、ベルリンさらにはプラハがあり、限られた時間内ではフロイト、クラゲス、ヘルマン・バル、カフカなど範例的な作家あるいは思想家を取り上げて、モデルネの文学を推進していった個々の顕著な事象から全体を展望することしかできない。その際、モデルネの文学の本質規定そのもの、あるいはそれに付随するデカダンスやディレッタントイズムその他の諸現象はいま問題ではない。

その上、彼らのゲーテに対するプロあるいはコントラ、場合によって無関心の態度の背景にはゲーテ文献学の成立とその功罪という学問史的問題がある。ベルリンのシェーラー学派によるワイマール版ゲーテ全集の編纂事業は1885年から1919年に及び、またホフマンスタールなどによる若いゲーテ再評価のきっかけとなった『ウルファウスト』と『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』の写本はそれぞれ1887年と1910年に発見されたのである。また、ワイマールのゲーテ協会に先立つこと7年まえ、1878年に創設されたウィーン・ゲーテ協会が最初からめざしていたのはゲーテ記念碑であり、オーペルンリングのゲーテ座像がフランツ・ヨーゼフ皇帝臨席のもとに除幕されたのは、奇しくも1900年のことであった。

しかも、ビルショウスキーからグンドルフに至るまで世紀転換期にドイツで最も成功を収めたゲーテ伝は、ほとんどみなユダヤ系のゲーテ学者の手になるものであった。同じゲーテ受容であっても、ドイツ語圏内では多種多様な傾向が認められるのである。しかし、このように複合した時代状況であればこそ、それぞれの専門家がシンポジウム形式で研究成果を発表するのは、必要かつ大いに意義あることと考えられる。

[戻る](#)

# レオナルド・ゲーテ・フロイト

高橋明彦

---

フロイトは「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」の第二版（1919年、初版は1910年）に新たな注も設けてその1917年に公にしたゲーテ論「『詩と真実』中の幼年時代の一記憶」の要旨を挿入している。この新たに付加された長い注釈は次のような推論の可能性を示唆しているように思われる。すなわち「レオナルド論」の考察の出発点となったアトランティコ手稿中のあの「はげたか（正しくは鳶）幻想」と、ゲーテの『詩と真実』第一部第一章に記述されている食器壊しの事件についての記憶とを、ともにいわゆる前エディプス期における原初的な母子関係の方向へと引きもどしながら解釈することの可能性である。エディプス的葛藤のドラマ以前に遡る前エディプス的位相については、この時期のフロイトによってその重要性は認識されてはいたものの十分に理論化されるにはいたらなかった。とはいえ、父親のエディプス的威嚇に何ら妨げられることのなかったレオナルドの幼年期における「性探究」についてフロイトは再三強調しているし、ゲーテにおいて注目されているのは彼の「強さ」がそこに根ざしているとされる「母親に対する関係」である。この二人の「母親から特別に寵愛を受けている息子」とその母親とが作り上げるナルシシズムの空間についてささやかな想像をめぐらせること、このことがこの発表の目的となるう。

---

[戻る](#)

# ゲーテ的人間の限界ークラークスの哲学から見た ゲーテ像

田島正行

---

クラークスのゲーテ批判の要諦は、「ゲーテは果して詩人であったのか」という疑念に尽きると言ってもよい。クラークスによれば、詩人とは、その陶酔的体験の渦中で「世界の心」と化し、「原像の現実」を歌い上げる「遅れてきたディテュランビカー（酒神賛美詩人）」であるとされる。若きゲーテは、確かに、こうした意味での詩人であった。しかし、ヘルダーリンのように、燃え上がる「詩の壮麗な炎」によって焼き尽くされることはなかった。ゲーテは「原像の現実」を忘却し、「人間の世界」に帰ってくる術を心得ていたのだ。そしてこの点にこそゲーテの偉大さがあると同時に、またその限界もある。ゲーテは「炎の死」に憧れながらも、「自己保存」を決意したのである。だが、「個人と万象とは敵対的に対立しており、前者を廃棄することによってのみ後者への道は開かれる」。そうである以上、ゲーテの偉大さもその叡智も人間的なものに過ぎないのであって、これを越えるものではない。ゲーテの魂は「宇宙的諸力の呼び声」について行くことはなく、あくまで「人間の世界」にとどまっているのだ。以上のようなクラークスのゲーテ批判は正鵠を射ているであろうか。ゲーテは「原像の現実」を忘却し得たのでであろうか。むしろ「原像の現実」と「人間の世界」との間を往還し、この二つの世界を宥和させようとしたのではあるまいか。

---

[戻る](#)

# ヘルマン・バルとベルリン・モデルネ

神野眞悟

---

「ウィーン・モデルネ」を代表する作家・批評家ヘルマン・バルとベルリンの関係は複雑かつ微妙である。バルにとって大都市ベルリンとその文化は、常に「誘惑する」存在であったと同時に、絶えざる「克服」の対象でもあった。ベルリンは、バルが独自の「モデルネ」観を築き上げて行くためには避けて通れぬ「関門」であった。

バルは1884年、学生として初めてベルリンを訪れて以来、3度にわたってこの街で長期滞在することになる。いずれの場合も、当初は満足の行く成果が得られるものの、最終的にはこの街と折合いがつかなくなり、傷心の内にこの街を去る結果になった。しかしバルはその度に、敬愛するゲーテに倣うかのように、「挫折」を糧としつつ、新たな活路をパリやウィーンに見だし、「モデルネ」の推進者として一層の飛躍を遂げて行くのである。

本報告では、バルのベルリン時代に書かれた作品群、目下刊行中の「日記・草案・覚え書き集」等を参照するとともに、バルの行動・思想形成に大きな影響を及ぼした世紀転換期の「人間ゲーテ」像にも着目し、バルが「ベルリン・モデルネ」から何を受け取り、さらにそこから何を生みだしたのかを探って行きたい。

---

[戻る](#)

# 多民族都市プラハにおけるゲーテーカフカにみる ゲーテ像

三谷研爾

---

カフカが集中的にゲーテに取り組み、まとまった発言をのこしているのは、1911年から翌12年にかけての冬のことである。これはちょうど、イディッシュ語劇団との出会いをきっかけに、カフカが東方ユダヤ人の文化的伝統に目を開かれた時期にあたっている。彼は、劇団の俳優イツハク・レーヴィとの交友を深めながらユダヤ関連の文献を渉猟する一方で、ゲーテを読みすすめていったのだ。じっさい、当時の彼の日記には、ゲーテへの言及とユダヤ文化についてのコメントが、ほとんど交互にあらわれている。この奇妙な事態を、カフカ個人の生活史のみならず、世紀転換期の多民族都市プラハの社会的コンテクストに照らして検討することが、この報告の目的である。これまで多くの研究者は、カフカが文学創作上の理想としてゲーテを崇拝していたという親友ブロートの証言にもとづいて、この作家におけるゲーテ受容を理解してきた。しかし、同化ユダヤ人が直面していたプラハの状況、およびカフカ自身の含みに満ちた発言をこまかく見ていけば、従来の理解には相当の留保がつけられなければならないと思われる。こうした方向から、『イディッシュ語についての講演』ならびに日記中のいわゆる「マイナー文学論」にも触れる予定である。

---

[戻る](#)

# レキシコンと文法 - 項構造の扱いをめぐって

(Lexikon und Grammatik - Argumentstruktur und ihre Modifizierungen)

司会：高橋由美子・岡本順治

80年代以降、生成文法において「句構造は語彙構造の投射である」という考え方が定着し、語彙情報の重要性が確認されるに伴い、近年の言語研究では「語」（特に動詞）という言語単位に注目が集まりつつある。動詞の統語的・意味的特性が文の構造と意味を決定するという考えが浸透し、動詞が持つ項の数や概念構造、さらに相についての研究が盛んである(Grimshaw(1990), Jackendoff(1990), Tenny(1994), Goldberg(1995), Levin/Rappaport(1995), 影山(1996), 丸田(1998)など)。この研究の流れには、動詞を用いる際の背景的知識の重要性を指摘する認知言語学や、動詞の振る舞いに関する言語間の相違に関心を寄せる類型論研究も大きな刺激を与えており、さらにドイツ語圏においても Bierwischの意味論に依拠した Kaufmann(1995), Stiebels(1996), Wunderlich(1997)などの語彙研究が独自の進展をみせていることも注目に値する。

このような近年の言語理論の流れに鑑み、本シンポジウムではドイツ語の文法現象における「動詞」の役割に着目し、その項構造の扱いをめぐっていくつかの視点から考察を行う。まず、鈴木は名詞派生動詞をとりあげ、その形成の可否は統語的な規則により説明可能であるという Hale&Keyserの主張、ならびに語彙概念構造における特定位置への定項の挿入としてこれを説明する影山の主張を比較検討する。小川は、与格名詞句、属格目的語、さらに動詞前綴をもとに、語彙についての知識と統語構造、さらに意味解釈の関係にみられるダイナミックなメカニズムを扱う。動詞が持つ複数の項構造が、統語論と関係するだけでなく、その動詞の属する意味クラスと連動する交替現象として捉えられることが明らかになりつつあるが、このような視点から岡本は結果構文ならびに動能交替、また大矢は移動様態動詞といわゆる搬動語法の接点を扱う。その際、岡本は両構文は特定の動詞クラスの項構造の拡張であることを指摘し、大矢は移動様態動詞とともに生起する再帰代名詞について考察する。最後に鷺尾は、ドイツ語と日本語および中期モンゴル語における自動詞受動を比較対照し、既存の見解に対し再考を促す。

本シンポジウムの目標は次の2点にある。まず、ドイツ語における個別的な文法現象を議論することにより、近年の言語理論の発展にドイツ語研究サイドからの寄与を試みる点、ならびにドイツ語と他言語と可能ないし有効な範囲で比較対照することにより、言語の普遍性と個別性についての類型論的議論にも貢献しようとする点である。

---

[戻る](#)



# 名詞派生動詞の形成と語彙概念構造

鈴木直樹

本発表ではドイツ語の名詞派生動詞の形成メカニズムを検討する。従来、名詞派生動詞の形成に関しては、Hale & Kayserのような統語的枠組みの中でそれを扱うアプローチと、影山に代表される語彙概念構造を用いたアプローチの二方向が提唱されてきた。このうち前者は、名詞派生動詞の形成を純粹に統語的な現象にとらえ、その可否は空範疇原理や障壁といった統語制約の適用により説明可能であるという立場をとっている。他方、後者のいう語彙概念構造とは、外界と統語構造との間のいわば橋渡しの意味構造で、名詞派生動詞の形成はこの意味構造への定項挿入により説明可能であるとされる。すなわち、名詞派生動詞の形成には語彙概念構造の認知的際立ち(cognitive salience)が関与していて、その可否は定項を挿入する位置の際立ちの度合いにより決定されるという主張である。本発表ではこれら互いに異なる先行研究のあり方をふまえ、ドイツ語に存在する名詞派生動詞の形成についてより妥当な説明の方法を探っていきたい。

[戻る](#)

# 語彙知識，統語構造，意味解釈

小川暁夫

---

本発表では、レキシコンに関する知識がいかに統語構造に反映され、さらにそれがいかに個々の意味解釈に至るのかを、経験的な言語データを手掛かりに議論する。その目標は、レキシコンにおける「項構造」の在り方と形態・統語部門における項構造拡大・縮小のプロセス、そしてそれに連動した意味解釈のメカニズムを解明することである。

具体的にはドイツ語における与格名詞句、属格目的語、動詞前綴を中心に取り上げる。与格名詞句に関しては、レキシコンで指定される項構造に含まれるものは僅かであり、その大部分が項構造拡大のプロセスを経ていること、さらには与格名詞句の個々の意味がいわゆる「意味役割」としてレキシコンではなく、より一般的な「意味付け」のプロセスによって決定されることを主張する。属格目的語に関しては、項構造、統語構造、意味解釈の3つのレベルが互いに「有契的 iconic」に関係していることを、その語史的展開も含めて論じ、現代ドイツ語では特異とされる属格目的語が属格形である（あるいはあった）必然性について考える。そして動詞前綴に関しては、形態・統語部門における項構造縮小のプロセスが仮定できるが、これに連動していかなる意味解釈の原理が働き、結果としていかに複合動詞の個別的意味が顕在化するかを議論する。

以上の考察を言語類型論的に一般妥当性の高い理論の構築に資すものとするためにも、他言語における当該の関連現象にも言及する。

---

[戻る](#)

# 結果構文と動能構文：項構造の拡張の2つの形

岡本順治

結果構文(Resultative Konstruktion)による項構造の拡張は、これまでの言語類型論的諸研究から特定の言語でしか可能ではないことが明らかに成りつつある(Washio 1997a, 岡本 et al 1998)。ドイツ語や英語に見られるような自動詞を基にした結果構文は、結果構文が可能だとされる諸言語の中でも、許容される言語とされない言語に分かれることが知られている(Kageyama 1996, Washio 1997b)。このような事実に基づくと、結果構文による項構造の拡張は、特定の言語では生産的なプロセスであるが、その他の言語では非生産的であるような個別言語的なパラメータであると推定できる。一方、動能交替(Konative Alternation)は、打撃接触動詞において典型的に見られる現象であり、動能構文は、「結果を含意しない」形態であることも知られている。

(1) Alex schlug eine Fliege tot. (結果構文)

(2) Alex schlug nach einer Fliege. (動能構文)

(3) \*Alex schlug nach einer Fliege tot. (動能構文 + 結果構文) 当発表では、この2つの構文が、1) 活動動詞(Activity Verbs)の項構造拡張として排他的に機能していることを意味構造のレベルで説明するとともに、2) 複合述語として「語の内部での統語構造」として捉えることが妥当であることを主張する。この立場に立つことにより、不変化詞動詞(Partikelverben)を使った結果構文と動能構文の分布も同じように扱えることを確認し、これらの現象がさまざまな程度での語彙化(Lexikalisierung)の過程にあることを見る。

[戻る](#)

# 語彙概念構造と再帰代名詞の出没

大矢俊明

---

移動様態をあらわす動詞に方向をあらわす前置詞句が付加された(1)のような構文は「移動」をあらわすとされ、しばしば「非対格性」を持つ(=主語はもともと直接目的語の位置にある)と指摘される(Grewendorf 1989, Levin/Rappaport Hovav 1995)。

(1) a. Er tanzt in den Saal.

b. Er rennt auf den Fussballplatz.

このような既存の見解に対して、本発表では(1)は使役の構造を持つことを主張する。この構文は、[x ACT]CAUSE[x MOVE PATH]として表示され、概念構造上は「行為の主体」と「移動の対象」は同一の実体 x を指示する。つまり、(1)には(見えない)再帰代名詞の存在が想定され、この再帰代名詞は特定の条件が整えば次のように具現しうる。

(2) a. Er tanzt sich durch die Menschenmenge.

b. Er rennt sich zum Verderben.

すると(1)は(3)と同様、いわゆる搬動語法の一つということになる。

(3) a. Er arbeitet sich nach oben.

b. ... man redet sich in die Liebe, wie in den Zorn...

以上の考察を裏付けるために、(1)と次のような英語における類似構文との若干の比較も試みる。

(4) The halfback ran the ball six yards.

---

[戻る](#)

# 自動詞受動の類型

鷲尾龍一

日本語タイプの言語には、非人称受動は存在しないと言われている。この一般化は、論証の必要すらない自明の命題として受け入れられているようであるが、いわゆる外項の抑制など、ドイツ語において非人称受動を可能にしている抽象的な仕組みは、日本語にも存在すると考えられる。したがって、受動化を許す動詞類が日本語とドイツ語で大きく異なるのはなぜかという問題を、非対格仮説や主語昇格排他性の法則に基づいて単純に説明することはできない。

本発表は以上のような観察を出発点として、アルタイ系の言語における自動詞受動をドイツ語の非人称受動と比較し、若干の理論的考察を試みるものであるが、考察対象には (i) haben/sein の選択と受動可能性との関係、(ii) 受動文形成において Animateness (あるいは Agentivity/Volitionality) が果たす役割、(iii) ヴォイスとアスペクトの接点、(iv) 受動の助動詞と言われる werden の統語的・意味的役割、(v) 与格表現と受動表現の機能的対応、などの問題が含まれる。

中期蒙古語や日本語との比較を踏まえたこの議論は、(vi) 非対格仮説および主語昇格排他性仮説の妥当性をめぐる理論的な考察へと至り、最終的には、(vii) 自動詞を受動化することの意味が、比較文法論的視点から問い直されることになる。

[戻る](#)

# ドイツ語の心態詞における音声的特徴について

生駒 美喜 慶應義塾大学非常勤講師

川森 雅仁 NTT基礎研究所

ドイツ語の日常会話においては心態詞 (Modalpartikeln) とよばれる言葉が頻繁に用いられる。これらの語は、会話において、話者の様々な心理的ニュアンスを表す。岩崎 (ドイツ語副詞辞典, 1998)によると、dochという語が平叙文に用いられる場合、先行する発話にたいする反論・抗弁や、予想される相手の反論を先取りしつつ、それに対する反論の理由、などいくつかの異なった意味を持ちうる。こうした心態詞は普通、イントネーション上のアクセントを持たないとされる。したがって、アクセントの有無が意味の違いと深く関わっている。

一方、ドイツ語においては、同じ平叙文であっても様々なイントネーション型が用いられ、イントネーション等の韻律的要素自身が、話者の微妙な心理的ニュアンスを表すとされている。

こういった、文アクセントやイントネーションなどの韻律的要素が、心態詞の意味・機能とどう関係しあっているのかを、解明することは、実際のドイツ語をより理解するうえで非常に重要であり、その実用的、教育的効用も大きい。本研究において、我々は、心態詞の中でも頻繁に用いられるdochを例に、実際の対話に現れる表現を調査し、それから得られた録音データにもとづく音響分析を行い、それにより、ドイツ語の日常発話において話者が心理的ニュアンスを的確に表現するために用いる心態詞と韻律的要素との関係について、考察を加える。

[戻る](#)

# 叙述法の識別と主語の表現

藤縄康弘（愛媛大学講師）

---

直説法や接続法、命令法といった動詞の叙述法は、重要な屈折的カテゴリーであるにもかかわらず、現代のドイツ語においてその識別は容易ではない：同一の語形が複数の叙述法を示し得るし、ひとつの叙述法を示すのに可能な語形も往々にして複数存在する。そこで、共起する主語の人称と数に鑑み、形態・内容間の錯綜した対応関係に整理をつけ、叙述法を読み取らねばならない。現代のドイツ語では、叙述法の識別に欠かせないという理由から、主語の表現が基本的に不可欠になっているものと考えられる。

とはいえ、主語はときに現れないこともある。わけても、mir grautやmir ist kaltのような非人称の述語が、主語の表現を欠いてもなお成立するのが問題である：一方ではes regnetやes ist kaltのような述語が必ず文法的主語を（形式的なesながら）擁するのに、他方では主語の不在が許される - なぜなのか？

これは、どんな文にも主語の存在を想定する限りは解決困難な問題であろう。しかし、上述のように主語の存在理由を動詞の叙述法との関連に求めるなら、説明の途は開かれる：叙述法を識別する必要性がないから、主語の表現も無用である、と。この説の当否を確かめたい。具体的には、叙述法の選択が文法的に条件づけられるケースとして、要求文や願望文、感嘆文といったSatzartenやある種の補文を取り上げ、非人称述語のこれら環境への適合性を吟味する。

---

[戻る](#)

# Über das Deutschland- und Deutschenbild japanischer Deutschstudenten - Eine empirische Studie und ihre methodologisch-didaktischen Aspekte

Matthias Grünewald  
Matsuyama Universität

---

Um sinkende Studentenzahlen zu vermeiden und die Attraktivität des Fachs Deutsch zu steigern, ist es von großem Interesse zu erfahren, welche Vorstellungen Deutschstudenten von Deutschland haben und was sie an der Sprache Deutsch interessiert. Eine Möglichkeit, die Anziehungskraft zu erhöhen, stellen sicher auch Aufenthalte in deutschsprachigen Ländern dar.

An mehreren Universitäten in Japan, u.a. der Universität Matsuyama, werden solche Reisen unterstützt und organisiert. Doch fördert ein solcher Aufenthalt tatsächlich die Motivation, Deutsch zu lernen? Und verändert ein solcher Aufenthalt das Wissen und die Vorstellungen über das bereiste Land?

Im Juli und Oktober 1998 wurde zu diesem Zweck an der Matsuyama-Universität eine Fragebogen- bzw. Interviewstudie bei einer Gruppe von insgesamt 20 Deutschstudenten durchgeführt, die im Sommer 1998 am Goethe-Institut in Priem einen einmonatigen Deutschkurs besuchten.

Nach der Vorstellung der Ergebnisse sollen einige Überlegungen über die Möglichkeiten, aber auch z.T. kulturspezifischen Schwierigkeiten der Erfassung insbesondere nicht-objektivierbarer Daten angestellt werden. Auch die methodischen Hilfsmittel Fragebogen und Interview werden dabei auf den Prüfstand gestellt.

Schließlich sollen einige didaktische Anregungen gegeben werden, wie das landeskundliche Bild der deutschsprachigen Länder bei japanischen Deutschstudenten möglichst realitätsnah und adressatenorientiert aufgebaut werden kann. Damit eng verknüpft soll auf einige wichtige Aspekte bei bevorstehenden Deutschlandaufenthalten von japanischen Deutschstudenten hingewiesen werden.

---

*e-mail: [gruene@cc.matsuyama-u. ac.jp](mailto:gruene@cc.matsuyama-u.ac.jp)*

---

[zurück](#)